

[Faint, mostly illegible handwritten text in cursive style]

正應二年世妻哥合

一妻 月前露

左 抄

女房 伏見院

神祇... 考... 在... 月... 志... 院... 友

右

申 符

竹乃禁... 考... 在... 月... 志... 院... 友
 左乃... 乃... 社... 川... 不... 取... 文... 之... 月
 乃... 事... 不... 神... 也... 殊... 以... 考... 在... 之... 月... 志... 院... 友
 氣... 之... 乃... 考... 在... 之... 月... 志... 院... 友
 乃... 考... 在... 之... 月... 志... 院... 友

一多右乃勝日なり侍

二番

左持

延政門院新之納言

西乃後朝場乃月此彩きく高成つぬ味乃系す

右

從一位友原朝元教良女

光乃竹紫乃あよ月をみくひる重心乃由ぬ規えき

右の奇古今集乃秋の野よなく志く病の

たぬかきや川ら好きうら味乃系論ある

朝成よりて月華網在味系上く侍る沈庸

歌々秋乃詞此きくくあひとまきて侍る

右乃奇小竹系乃あよ月の老成くへて秋乃

いかにあはれゆもきり打極むる老成下

乃白きくといあがききて侍る新場乃

月竹系乃あはれゆまき時日きくひるの

奥乃あはれゆくれく南くおくり城乃あ

く月乃あはれゆく持もあ

四番

左持

永福門院内侍

はえ白き竹乃よきあ乃く月と身くひ又を言き

六

左近衛中納言友原朝元教良女

六番

左

沙芽生花あふやうとねまて更なる包にほめる月影

右

剗宰お

高き風沙芽よあつきて月のまを又雲をひら

たのまをまに雲あまら沙芽の右のまあ

物志のりふのうき月と流のりふとる神識

幽玄はゆきとて更なるまを腰のうづら

まのひゆふ古まはもくぬ秋飛乃

そよとあつきてりらあまのまを

八月のまをま雲のりまとて中晴曇る祈

の乃漢武帝は社風辞は社風起白雲飛

くゆらまをひり社乞の氣象まひ入

ゆらゆきとて右の勝も社乞は先ま

七番 暮乞雁

左

後兼朝臣

まのまをまをまを社乞の翅まをまを遠まの

右

剗宰お

霧あふまをまをまのまをまをまを

た乃奇まをまのまをまをまを

伊のよや右乃分より難く侍連に
まゝに御懐神にて御し給へ侍連
なほ人の御是と持たるるに
あはれなり

九番

左勝

内侍

とくし雲井の事と唱へ給ふ事と
いふ事と

右

家親朝女

突つた事と申す事と
右乃身の人事と申す事と
日長日短と申す事と
西上人給ある

類々無儀下日か
その分は彼様丸ま
し麻乃事と申す事と
御侍より取らるる事と
申今此雲井の事
乃さぬ事と申す事と

十番

左

剃上納言

いふ事と申す事と
いふ事と申す事と

右勝

従一位右原朝女

雲收行雁欲下しん秋まがしめて吟詠よ
ろくちなるまを志らうかへ人丸の首よ結さ
まにたれぬ風よおれぬをえまをくわの阿奴
さぬふくゆるは阿奴うらこひ彼も是も捨
うくそのおよ中理つとゆる

十二番

尤指

女房

越路より雲乃びて城分とて都へまねて津戸

尤

中ね

はゆの花ちる萩は風まきし雲井乃かかるとうらうら

たのしみあふま百妻乃并命よ初なる是越路
の香気よけ送くみ々夫乃替り今我鳴
かふま三宮れまみのひー面影あるは是を
越路乃遠きまよりて暮ま来きるとのまに
ろまや腰乃末白め白よそやま昔かをひ右
乃分難なく侍連し一毎腰の祈かまて
勝と申し履支つとの祈もを侍り人持くま
より外乃事なまや

十三番 野暮秋

尤勝

女房

野邊みきとらうい様交秋がまをみ竹の末と念出ぬ

右 中ね

なまがひ虫の急の端しと申おがら秋の暮る
九乃虫あちういぬあきぬやとゆふと秋
とりて暮秋乃心影を侍る末乃白と凡今
はくあきとに侍る人拾遺集又連をく
しか代懸地心ふいぐ夜夜寝てのひ乃さ
ひきと侍るよりけいさあ乃とくさ
さむのしとて紫のまなうとくさ
輩乃平仙中なる道一なりと道一の燕乃

しきと急を急は秋色さむとまをい
らうるあ乃神なり古交なまのひと
最連法所あまも秋海を申人の竹葉れ
あよりもなまがひとる虫のあふさ
侍るさむと急の急の急をいひて又さ
しと急侍る詞のつきよりと侍る
さく九乃御さうりなむひとゆふと
さむ乃み山本とさむと

十尺麦

九お

夜系納言典侍

こよひのやまに 村原の冬も かなしき 我身は 秋の暮方
の 従三位親子

野邊をき 尾花の風吹かして 暮文夕日 秋の暮方

左乃 秋夜 とうとうと 村原の村の 迷懐もや

右乃 冬 尾花の風吹かして 暮文夕日 秋の暮方

ゆき 冬 尾花の風吹かして 暮文夕日 秋の暮方

雪の 冬 尾花の風吹かして 暮文夕日 秋の暮方

十五番

丸

新大納言

暎多し 丸の冬 尾花の風吹かして 暮文夕日 秋の暮方

右膳

従一位 友原胡長女

夕日 暎多し 丸の冬 尾花の風吹かして 暮文夕日 秋の暮方

丸の 暎多し 丸の冬 尾花の風吹かして 暮文夕日 秋の暮方

暎多し 丸の冬 尾花の風吹かして 暮文夕日 秋の暮方

暎多し 丸の冬 尾花の風吹かして 暮文夕日 秋の暮方

暎多し 丸の冬 尾花の風吹かして 暮文夕日 秋の暮方

暎多し 丸の冬 尾花の風吹かして 暮文夕日 秋の暮方

暎多し 丸の冬 尾花の風吹かして 暮文夕日 秋の暮方

暎多し 丸の冬 尾花の風吹かして 暮文夕日 秋の暮方

暎多し 丸の冬 尾花の風吹かして 暮文夕日 秋の暮方

秋の夕の月 疎らり 雲のさす 世なる 世なる 世なる
 尤も夕の月 疎らり 雲のさす 世なる 世なる 世なる
 いまも 秋の夕の月 疎らり 雲のさす 世なる 世なる 世なる
 是の 暮秋の 秋の夕の月 疎らり 雲のさす 世なる 世なる 世なる
 何れか 抑は 昔の 夕の月 疎らり 雲のさす 世なる 世なる 世なる
 割古 今に 長月 といふ 昔の 夕の月 疎らり 雲のさす 世なる 世なる 世なる
 うちの 秋の 夕の月 疎らり 雲のさす 世なる 世なる 世なる
 さき して 夕の 秋の 夕の月 疎らり 雲のさす 世なる 世なる 世なる
 侍ん 仍た の 勝らん

十八

丸猪

俊兼 胡卡

秋の夕の月 疎らり 雲のさす 世なる 世なる 世なる
 割古 今に 長月 といふ 昔の 夕の月 疎らり 雲のさす 世なる 世なる 世なる

折して 秋の 夕の月 疎らり 雲のさす 世なる 世なる 世なる

尤も 夕の 月 疎らり 雲の さす 世なる 世なる 世なる
 その 夕の 月 疎らり 雲の さす 世なる 世なる 世なる
 侍ん 仍た の 勝らん
 折合 して 秋の 夕の 月 疎らり 雲の さす 世なる 世なる 世なる
 世なる 世なる 世なる 世なる 世なる 世なる 世なる 世なる
 又 折して 秋の 夕の 月 疎らり 雲の さす 世なる 世なる 世なる

くあれおろし時辰の川をさす光陰のう
つらむらさきと表はくせひの中をさゆさく又勝の
字は海たる付中事なるなりぬ

十九番 寄海待意

九

俊兼朝臣

待より海乃うらに詠をきてしつと夕光をそふりき

右勝

新宰お

と青之糸ひかり姫とと思ひはく世調す月小灯乃色
た乃弁待よりうらなるきし川とささく此
侍ん古のこころをさそとむむらぬと青

夫とくさ人の字は歌を侍る殊勝乃事也
白くつらと禁古きさあもと枕を禁よと
多くみは侍らぬ万葉集よ朝日新の
角の山はてさ月乃がさそとあつるは
涙は白く灯乃多く古詞はむいしは海あり
らくすさ事と和奇は念巻ささく
京極乃黄門中をささく侍るやさくし右
のこころをさそと侍る多く勝は定め侍らぬ

廿五

九

兼行

才多きく涙くるる浅かきもて羨多きを侍りし人
右膳

九條元長女

侍りし人ふくすて更ふ来よ泪あやもいもいもき乃神
た乃奇く神はあたる泪くるる浅かきもて
よきゆ衆多き事な侍りし人か人かあき
かろ浅かきのみ又めてきく幽言も侍り
ふよのききめく人目浅かきもいもいも
かき乃くワいほるもあきくゆき
かき神をひらりもいもいもいもいも
ひらりもいも侍りし人仍勝たき

廿一
丸勝

内侍

さくらんぬをさよといひも侍りし人泪あき

右 家祝朝臣

侍来し程なくはまて疑ふあきよあきぬ泪あき
た乃奇侍りし人さきいもいもいもいも
さくらんぬ者いもいもいもいもいもいも
くつをきくしやあきあきあきあきあき
さきぬせんさきあきあきあきあきあき
さきあきあきあきあきあきあきあき

ふたすすなほしとてあうとや内へ理を
よも侍もく世務きり人

廿二番

九持

判大納言

侍うも鐘乃ひきも更ぬふよ涙の敷とそ

右

従一位友原朝臣女

内里とて世にほくもあふもよ涙をわすれ

右 鐘乃響も敷をけりしとれしよひく

さりそふあかり右 文侍もるも涙乃

かきしとてあふもよ涙をわすれ

世さく免非く侍ん九持乃あふるも

右 時感とて涙をそくひしよるも

ゆかひ之と持て人

廿三番

九持

友原大納言典侍

侍乃人よきとてさるも涙乃床もあふるも

右

従三位親子

さか文むかあか歌もて更ぬ先より涙を

右 乃あふも侍乃人よきとてさるも

かきしとてあふもよ涙をわすれ

たれ人しあきしやあきか意乃本さすて
あきあふ涙の麻は打志月道くはふ祈は
しうしあきしやあきか意乃本さすて
す為勝

廿四番

九持

女房

新中乃名やよるも山がもやるぬる涙を
あ

者

中將

新中乃名やよるも山がもやるぬる涙を
あ
た乃所歌下侍の歌の程も人よるもあ

あかえは涙乃あきしああ新さししせらあ
あかりそあゆふやいし月を仔細あ後よあ
きうはしとるも結くあのみあゆ凡ああ
よ侍乃万葉集もしし屋ひあをの事新さ
あぬい乃あま日すあ教を月あし侍新さ
あゆああああああああああああああ
あひく人ああああああああああああ
乃鐘をあああああああああああああ
ああああああああああああああああ
ああああああああああああああああ
廿五番 寄夕絶意

たぐもよきしをいふは勝よかきしをいふ

廿六

左

夜原大納言典侍

おとこもよきしをいふは勝よかきしをいふ

右

従二位親王子

おとこもよきしをいふは勝よかきしをいふ

たぐもよきしをいふは勝よかきしをいふ

たぐもよきしをいふは勝よかきしをいふ

たぐもよきしをいふは勝よかきしをいふ

たぐもよきしをいふは勝よかきしをいふ

廿七

左

朝大納言

おとこもよきしをいふは勝よかきしをいふ

右

従一位夜原朝臣女

おとこもよきしをいふは勝よかきしをいふ

たぐもよきしをいふは勝よかきしをいふ

たぐもよきしをいふは勝よかきしをいふ

たぐもよきしをいふは勝よかきしをいふ

たぐもよきしをいふは勝よかきしをいふ

たぐもよきしをいふは勝よかきしをいふ

廿八歳

左持

内侍

今更人母本ノミそく園此表打道多本ノミと見え思ひ

右

家規胡片

かゝるは始り終りまで思ひ祈り爰み一夜の同敷

支そくなまふゆしかく又誰もなまふ

女持なり侍人

廿九歳

左持

兼行ハ

又もえぬ視の後成そのまに思ひさまぬ家を思ひき

右

九條元長女

いふと思ひ四層を繋るゆめもと思ひて申すは申す也

右の縁を申す中に成すまりもと思ひて申す

あらんはらし御まや左の煩悩執忌乃少文

不成欲くらし一毫もあらずと思はし也

いみまし之の判者と定むは何れも持たず也

卅歳

左

彼兼胡片

馴しまらずのから思ひ祈りを申すは情を申す

右勝

割宰お

三十一

三十一

三十一

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document, written in dark ink on aged paper. The text is arranged in several lines, starting from the right side of the page and moving towards the left. The characters are somewhat faded and difficult to decipher precisely, but appear to be a form of historical Japanese calligraphy.

